

## マスク雑感

やっぱり、コロナ禍が我が家の生活スタイルを変えた。

医療関係の次女の一言で、盆の食事は中止、教育関係の長女は、秋恒例の焼き肉パーティも廃めましよう、と提言す。ミツ・ミツと教室の例を語って、ほぼ命令だ。

年寄は重症化しやすいそうよ……と、娘の言葉を私にぼやきながら、家内は寿司の出前を取り消していた。

届けてくれた七枚セットのマスク見つめながら、やっぱり、ステイホームか、と夫婦で納得したが、本当は、近くに住む青春真っ盛りの孫達の顔が見たいのだ。

今年の夏は、ウイズコロナの生活様式がひたひたと押し寄せて、世相の潮目が大きく変わったようだ。

私達の行動半径にある、病院、スーパー、公共施設、散策の自然公園など、何処に行っても、マスク必着、殺菌消毒、手洗い、ソーシャルデスタンス、検温ありで、途惑いもあるが、これが当面の生活スタイルになるのだろうか。

そんなある日、私は病院玄関で検温待ちの列にいた。すぐ前で、慌ててポケットを探るお爺さんに「これ、どうぞ」と包装のマスクを差し出した若者がいた。

お爺さんの怪訝な表情は一瞬に弛み、白い歯を見せて

「いやあ、助かったあ〜」と言って、押し戴いていた。

検温を済ましたお爺さんは、去り行く青年に黙礼し、帽子を振っていたが、その情景が私の好きな寅さん映画のエンディングに似ていて少し笑った。

待合室に座った私は、孫世代の青年を想い浮かべながらほっこりとした気分になった時、ふと思い出したのが、昔々読んだオー・ヘンリーの「賢者の贈り物」だった。

貧しい夫婦のクリスマスに、夫は金時計を売って、櫛を送り、妻は夫に時計の鎖を送るために髪を切って売った。

そんな至高の夫婦愛を讃えた短篇だったと記憶する。

私の目の前で自然体で演じられた、善意の生活劇は「賢者の贈り物」に繋がっていた。ウイズコロナは互助や連帯のプラス世相を育て、やがてコロナ禍は終息する筈だ。

その数日後だったが、悲しいニュースを読んだ。

緊急事態宣言中の四〜五月頃、議員秘書が選挙区内の有権者にマスクを配布していたのだ。品薄の時に、政党とは関係のない一般人に配布すれば、寄付行為を禁止している公選法に抵触か……の記事だ。

ウイズコロナの基調は、邪心なくマスクを渡した青年と寅さん風情で深い感謝を表した、あのひと幕の生活劇にありはしないか、と考えるのだった。

(富)